

中学生における共感性尺度の検討と 日常生活適応感との関連

大山 智子

Measuring Empathy and the relationship with Cognition of adaptation
in daily life of Junior High School Students.

Tomoko Oyama

The purpose of this study was to consider a measure of the empathy of Junior high school students and to examine the relationship between empathy and cognition of adaptation at home, in school and in interpersonal relationship. The study used The Empathy Scale for children (Sakurai 1986) and a 5-item questionnaire to determine the cognition of adaptation in daily life. The results showed a significant correlation between empathy and cognition of adaptation in daily life and also showed variation according to grade level. (In the second grade, both empathy and cognition of adaptation in daily life points found low, and in the third grade empathy points was high.)

1. 問題と目的

子どものいじめ、不登校、暴力や犯罪など心理的問題を背景とした現象が社会の中で危機感を喚起させ、対応が講じられて久しい。とりわけ中学生においては対人関係における問題が顕在化する時期でもある。このための予防的取り組みの一つに心理教育があり、近年さまざまなプログラムが行われている。

暖かく円滑な対人関係を築く上で共感性が重要であることは多くの研究により指摘されている。Eisenberg (1986) は向社会的判断の発達段階 (レベル 1～5) の一つとして共感的指向 (レベル 4a) を規定しており、また、共感 は利他性の基礎であると述べられている (Hoffman, 1981)。共感性の高かった人は攻撃行動が少なく、援助行動が多いという研究結果も示されて

いる (Mehrabian & Epstein 1972)。しかし、共感性育成のための心理教育プログラムは未だ少ない上に、中学生対象のものはあまり見られない。またこのようなプログラムの検討には、共感性の規定要因とその発達における実証的研究の構築が必要である。

共感性 (empathy) とは、Freshbach & Roe (1968) によると「他者の感情反応を知覚した際、反応者が他者と共有する代理的感情反応 (Vicarious Affective Response)」と定義され、その成立要素として、第一に他者の感情を弁別しラベリングする認知的能力、第二に他者の視点や役割を予測する役割取得能力、第三に、他者の経験しているであろう情動を経験する情動的反応性をあげている。その後、共感性は大きくは認知面、感情面の二つの側面からとらえ

られてきたが、近年はこれらを含む捉え方が適切とされている。(Mussen & Eisenberg, 1980)

共感性の認知的側面では、荒木・松尾 (1992) の研究で、中学生の社会的視点取得能力は学年が上がるにつれて上がるという結果が得られているように、年齢とともに上昇するという知見が多い。一方、出口・斎藤 (1991) の研究によると、中学生から大学生を対象として共感性を測定した結果、認知的共感性は年齢とともに増加するが、情動的共感性は年齢とともに減少するとされている。今後、情動的共感性の発達とそこにかかわる要因を明らかにしていくことは課題であろう。

さらに、共感性は、状況に規定される状況共感 (state empathy) と個人的特性に規定される特性共感 (trait empathy) の側面にもわけられており (Moore & Eisenberg 1984)、共感性の測定は、それぞれの側面からの方法で行われている。共感性育成にかかわる個人的要因を明らかにするためには、特性共感の検討は重要であると考えられる。

共感性の情動的側面および特性共感を測定する共感性尺度としては、Meharabin & Epstein (1972) の情動的共感性尺度 Questionnaire Measures of Emotional Empathy, QMEE) を加藤・高木 (1980) が標準化した尺度や、Bryant (1982) が児童用に QMEE を改定した浅川・松岡 (1984) 尺度、この2尺度をもとに作成された桜井 (1986) の児童用共感測定尺度 (Empathy Scale for Children:ESC) などがある。

本研究では、前述のような知見から考慮し、中学生において情動的側面から特性共感を測定し、その発達における特徴を見出すことを第1の目的とする。ここでは、1年生からを対象とするため、質問内容理解の個人差を考え、桜井 (1986) の児童用共感測定尺度を用いることと

した。

他方で、Davis (1994) が提唱する共感の組織モデルにおいては、共感は、先行条件・過程・個人内的な結果・対人的な結果の、相互に関連する4つの構成組織から組織されている。この先行条件とは、観察者、相手、状況の個人差要因である。これには、観察者の役割取得能力などの要因や、共感にかかわる価値や社会化行動の学習経験などが含まれている。すなわち共感性生起者の個人差要因を明らかにすることは、共感性の発達に影響を及ぼす要因を知る上でも有益な情報となり得るであろう。しかし、この個人差要因は多様なものである。

本研究では情動的共感性にかかわる個人的要因を探る探索的試みを第2の目的とした。これには日常生活における適応感や対人関係での適応感を取り上げ、情動的共感性との関連の有無を検討することとした。

2. 方法

1) 調査対象

調査対象は、東京都内 A 市公立中学校全クラスと B 市公立中学校全クラスの生徒である。内訳は Table 1 に示した。

Table 1 調査対象人数の内訳

		男子	女子	計
A 市	1 年生	34	36	70
	2 年生	32	32	64
	3 年生	27	40	67
	全生徒	93	108	201
B 市	1 年生	92	70	162
	2 年生	70	65	135
	3 年生	72	61	133
	全生徒	234	196	430
計		327	304	631

2) 調査内容

質問紙のはじめに「このアンケートはみなさんのふだんの様子や気持ちをおしえてもらうためのものです。成績などとはまったく関係のない調査ですから、安心してみなさんの思ったことをそのまま書いてください。」と記載し、配布、回収した。

① 共感性尺度

桜井(1986)の尺度を、中学生にわかりにくいと思われる文章を若干修正した上で全20項目を用いた。各項目について、「はい(5点)」「どちらかといえばはい(4点)」「どちらでもない(3点)」「どちらかといえばいいえ(2点)」「いいえ(1点)」の5段階評定で回答を求めた。

② 日常生活適応感質問項目(5項目)

日常生活の環境における適応感については、学校場面・家庭場面の各々について、「楽しい(5点)」「まあ楽しい(4点)」「ふつう(3点)」「あ

まり楽しくない(2点)」「つまらない(1点)」の5段階評定で回答を求めた。対人関係における適応感については、家族・友達・教師の各対象について、「うまくいっている(5点)」「まあうまくいっている(4点)」「ふつう(3点)」「あまりうまくいっていない(2点)」「うまくいっていない(1点)」の5段階評定で回答を求めた。

3. 結果

1) 共感性尺度の検討

桜井(1986)の尺度より全20項目の質問項目を用いて因子分析(主因子法)を行った。その結果、因子負荷が.40に満たなかった5項目を削除して再度、因子分析を行った(Table 2)。固有値1以上を基準として、桜井(1986)の結果同様、単因子構造と判断した。削除した5項目以外の15項目を共感性尺度項目とし、その合計点を共感性得点とした。

Table 2 共感性尺度の因子分析結果

	因子負荷量	共通性
元気がない人を見ると、心配になります	.67	.52
けがをして、いたそうな人を見るとかわいそうになります	.64	.44
動物がけがをして、いたそうにしているのを見るとかわいそうになります	.64	.44
泣いている人を見ると、自分までなんだか悲しい気持ちになります	.64	.42
悲しいドラマ(げき)を見ていて、つい泣いてしまうことがあります	.62	.68
うれしい時に泣く子は、おかしいと思います*	.58	.34
悲しい物語や映画を見ていて、泣くようなことはありません*	.55	.50
友だちがニコニコ笑っていると、自分までなんとなく楽しくなります	.54	.30
まわりの人がなやんでいてもへいきです*	.53	.29
とても楽しい気持ちになる歌が私にはあります	.53	.29
だれとも遊べないで一人ぼっちでいる人を見るとかわいそうになります	.50	.34
友だちがいじめられているのを見ると、はらがたちます	.46	.24
家族のいない老人を見ると、かわいそうになります	.44	.25
とても悲しい気持ちになる歌が私にはあります	.43	.28
犬やねこを人間と同じようにかわいがる人の気持ちはわかりません*	.43	.19
	寄与率(%)	31.0
	15項目の α 係数	.86
		*逆転項目

尺度の信頼性については、全 20 項目から 5 項目を削除した 15 項目の α 係数を求めたところ .86 という値を示し、内的整合性が高いことが確認された。

2) 学年差の検討

Table 3 のように、各変数間で一要因分散分析により学年差を検討した結果、友達関係適応感以外の変数において有意差が示された。多重

比較 (Tukey 法) の結果、共感性得点においては、1 年生・2 年生より 3 年生が、有意に高い結果が示された。また、2 年生は、学校適応感と家庭適応感では 1 年生に比べて、また、家族適応感と対教師適応感においては、1・3 年生に比べて有意に得点が低という結果が得られた。

Table 3 学年別の平均値 (標準偏差) 及び分散分析結果

	1 年生	2 年生	3 年生	F 値	多重比較
学校適応感	4.04 (0.99)	3.75 (1.14)	3.83 (1.13)	4.10*	1 年 > 2 年 *
家庭適応感	3.69 (1.13)	3.36 (1.11)	3.56 (1.11)	4.40*	1 年 > 2 年 *
家族適応感	4.01 (1.05)	3.74 (1.08)	3.99 (1.03)	4.11*	1 年・3 年 > 2 年 *
友達適応感	4.15 (0.91)	3.99 (0.95)	4.13 (0.95)	1.67	
対教師適応感	3.99 (0.86)	3.51 (0.95)	3.86 (0.91)	15.66***	1 年・3 年 > 2 年 ***
共感性	55.01 (11.55)	53.43 (11.91)	58.69 (9.48)	11.00***	1 年 < 3 年 *, 2 年 < 3 年 ***

* $p < .05$ *** $p < .001$

3) 性差の検討

性差に関しては各変数ごとで、t 検定により検討した (Table 4)。その結果、家族関係適応感 ($t = -3.41, p < .01$) が女子に比べ男子で有意に得点が低く、より不適応感を感じていること

が示された。共感性 ($t = -11.89, p < .001$) においても、男子は女子に比べ、有意に得点が低かった。この共感性が男子より女子に高い傾向は、Eisenberg & Lennon (1983) やその他の数々の研究と一致した結果である。

Table 4 男女別の平均値 (標準偏差) 及び t 検定結果

	男子		女子	t 値
学校適応感	3.79 (1.07)		3.98 (1.11)	-2.10
家庭適応感	3.46 (1.11)		3.63 (1.14)	-1.83
家族適応感	3.78 (1.05)	<	4.07 (1.05)	-3.41**
友達適応感	4.12 (0.91)		4.06 (0.96)	0.80
対教師適応感	3.72 (0.92)		3.88 (0.92)	-2.15
共感性	50.85 (10.65)	<	60.75 (9.45)	-11.89***

** $p < .01$ *** $p < .001$

共感性得点の平均値と標準偏差の学年別性差を Table 5 に示した。男女共に 2 年生で低く、3 年生は 1 年生より高い。女子に比べ、男

子の方がより 1 年生から 3 年生にかけて高くなる傾向が見られた。

Table 5 共感性の学年別男女差の平均値 (標準偏差)

	1年生	2年生	3年生
男子	49.34 (10.27)	48.56 (11.17)	55.41 (9.29)
女子	61.62 (9.25)	58.81 (10.33)	61.90 (8.58)

4) 学校差の検討

調査校2校の学校間比較を全項目においてt検定により行ったが、有意差は示されなかった。

5) 共感性と日常生活適応感との関連

共感性と日常生活適応感の環境適応感(学校・家庭の各場面)、対人関係適応感(家族・友達・教師の各対象)、各変数間の Pearson の相関係数を算出した (Table 6)。学校適応感と、友達関係適応感・対教師関係適応感において、また、

家庭適応感と、家族適応感においてなど、いずれも場面と関わる対象との変数間で中程度の相関が見られた。このことは、学校・家庭それぞれの場面における適応感が、それぞれの場面に関わる対人関係の影響を大きく受けていることを示すものであろう。

また、共感性と全ての日常生活適応感における変数との間に、低い相関が示された。

Table 6 共感性, 日常生活適応感の各変数間の相関

	学校適応感	家庭適応感	家族適応感	友達適応感	対教師適応感	共感性
学校適応感	—	.31**	.30**	.53**	.42**	.27**
家庭適応感		—	.62**	.20**	.32**	.20**
家族適応感			—	.36**	.39**	.21**
友達適応感				—	.39**	.21**
対教師適応感					—	.28**
共感性						—

** p < .01

さらに共感性と日常生活適応感の関連を深く知るために、日常生活適応感において、「楽しい」・「うまくいっている」と回答した高適応群と、「まあ楽しい」・「まあうまくいっている」と答えた中程度の適応群、「ふつう」「つまらない」・「ふつう」「うまくいっていない」と答

えた低適応群の3群に分け、各群の共感性得点の比較を一要因分散分析にて行なった (Table 7)。その結果、日常生活適応感の各変数における得点が高いほど、共感性得点が有意に高いことが示された。

Table 7 日常生活適応感と共感性得点の群間比較

		高群	中群	低群	F 値	多重比較
学校適応感	n	215	171	192		
	M(SD)	59.70(10.62)	55.21(9.50)	51.59(11.82)	29.14***	高>中・低***, 中>低**
家庭適応感	n	132	183	265		
	M(SD)	59.30(10.52)	57.26(9.59)	52.79(11.94)	18.40***	高>低***, 中>低***
家族適応感	n	228	138	212		
	M(SD)	58.84(10.29)	55.06(10.64)	52.60(11.79)	17.62***	高>中**, 高>低***
友達適応感	n	239	185	155		
	M(SD)	58.33(11.03)	55.60(10.17)	51.75(11.70)	16.99***	高>中*, 中>低**, 高>低***
対教師適応感	n	172	156	251		
	M(SD)	60.41(10.71)	55.51(10.19)	52.57(11.17)	26.97***	高>中***, 中>低*, 高>低***

*p<.05 **p<.01 ***P<.001

4. 考 察

本研究では、まず中学生において情動的共感性の尺度を用いて調査し、尺度の検討と共感性の発達の検討を行った。桜井(1986)の全20項目の共感性尺度をすべて用い、これを因子分析した結果、因子負荷量の検討から不相当と思われる5項目を削除した。残る15項目を尺度として採用することで、より顕著に情動的共感性の傾向を反映する尺度として用いることができたと考える。

ここで測定された情動的共感性の結果では、1年生から3年生にかけて、加齢に伴う共感性の発達を示さないという特徴が見られた。これは、出口・斎藤(1991)の研究結果とも一致するものであり、2年生の共感性が男女共に低く、3年生では高かった。ただし、出口・斎藤(1991)の研究では、女子は中学1年生から高校1年生まで段階的に上昇していたが、本研究では、男女共に2年生で低く、3年生では高くなる結果であった。これらの結果から、情動的共感性は中学3年の間にも複雑な発達過程を経ることが示唆されよう。今後のデータの収集および、詳細な検討が必要である。また、このことより中学生以降に於ける情動的側面から

の共感性育成の取り組みが重要であることも示唆される。特に共感性と日常生活適応感とに共通して、1年生、3年生に比べ2年生の得点が低かった。この関連や、2年生において認められた特徴をより深く検討していくことは今後の課題である。

そして情動的共感性と日常生活における適応感(家庭や学校における適応感および家族・友達・教師との対人関係適応感)すべての変数間に有意な相関が見られた。さらに、日常生活適応感の得点を高・中・低の3群に分け、各群間の共感性得点を比較した結果、日常生活適応感が高いほど、共感性得点も有意に高い結果が示された。家庭や家族および学校や友達、そして教師との適応感と情動的共感性の発達との間に関連が示されたことは、個人の日常的対人経験や対人感情と情動的共感性との関連を示すと考えられる。学校場面で日々接する大人である教師の影響も示唆されたことから、中学校の教育現場で共感性育成を意識していくことは重要なことであろう。

菊池(1988)は、養育者との強い感情的な結びつきが共感の先行条件となり、さらに母親、父親、教師、兄弟、友達やテレビなどマスメデ

ィアを通じてのモデリングや同一視、誘導的なしつけ、他人との類似点、類似した経験をした相手に共感しやすいという特徴などを、共感性を発達させ社会化させる要因として列挙している。今後、共感性の育成に貢献する個人的要因を多面的に明らかにしていくべきであろう。個人の日常的対人関係・生活環境で経験している感情と学習にまつわる包括的な尺度と共感性との関連の検討を今後の課題としたい。

謝 辞

本研究のご指導をいただきました昭和女子大学大学院教授 三浦香苗先生に深く感謝申し上げます。

また、統計処理におけるアドバイスをいただきました東京理科大学講師 竹尾和子先生に心よりお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 浅川潔司・松岡砂織 1984 共感性に関する発達の研究 兵庫教育大学研究紀要, 3, 97-126
- 2) 荒木紀幸・松尾廣文 1992 中学生版社会的視点取得検査の開発 兵庫教育大学研究紀要, 12, 63-86
- 3) Bryant,B.K. 1982 An index of empathy for children and adolescents. Child Development, 53,413-425
- 4) Davis,M.H. 1994 Empathy : A social psychological approach. Brown and Benchmark.
- 5) 出口保行・斉藤耕二 1991 共感性の発達の

- 研究 東京学芸大学紀要：I 部門第 41 号,東京学芸大学, 東京, 119-134
- 6) Eisenberg,N. 1986 Altristic emotion, cognition and behavior. Hilladale,NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 7) Eisenberg.,N and Lennon, R 1983 Sex differences in empathy and related capacities. Psychologocal Bulletin,94, 100-131
- 8) Feshbach,N.D. & Roe,K. 1968 Empathy in six and seven year-olds. Child Development,39, 133-145
- 9) Hoffman,M.L. 1981 The Development of empathy. In L.P. Rushton and R.M. Sorrentino (Eds.) .Altruism and Helping Behavior:Social,personality,and Developmental Perspectives,Lawerence Erlbaum Associates.
- 10) 加藤隆勝・高木英明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究,2 33-42
- 11) 菊池章夫 1998 また / 思いやりを科学する 川島書店
- 12) Meherabian,A. & Epstein,N. 1972 A measure of emotional empathy. Journal of Personality,40,525-543
- 13) Moore,B.S. and Eisenberg,N. 1984 The development of altruism. In G.Whitehurst (Ed.) , Annals of child development . Greenwich,CT: JAI Press.
- 14) Mussen, P. H. & Eisenberg,N 1978 Roots of caring,sharing and helping. The development of prosocial behavior. Freeman.
- 15) 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究 ,34,342-346

受理年月日 平成 15 年 9 月 30 日

審査終了日 平成 15 年 11 月 6 日